「商都下館」の原点（川島河岸＝舟の駅）

川島巡り探検板②

Kawashima tour expedition board

◀川島河岸の賑わいが伝わる銅版画（明治中頃）

左の銅版画は 1892 年（明治 25 年）12 月に出版された大日本博覧図（青山豊田郎･作 / 精行社･出版）に掲載された「川島東京間早船貨物運漕　各地鐵道川船貨物積替運漕所」です。江戸時代から川島河岸として栄えた鬼怒川の水運と、明治 22 年に開通した水戸鉄道 川島駅（開通時伊佐山駅）が鳥瞰でき、川島の歴史を知る上で貴重な資料です。
江戸時代、鬼怒川は幕府の整備により大型の高瀬舟が上流まで航行可能になり、東北諸藩と江戸を結ぶ水上物流の要所として栄えました。河岸（舟の駅）が賑わい、わがまち川島にも「小川」「川島」「伊佐山」「女方」等の河岸がありました。江戸時代からの河川水運の繁栄に想いをめぐらせながら、郷土の歴史を探検してみましょう。

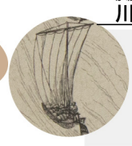
※鳥瞰（ちょうかん）：高い所から見おろしながめること。

◎建立協力　川島河岸 22 代当主・池羽啓次氏・下妻市ふるさと博物館

▼約 130 年後の現在の様子（2019 年）

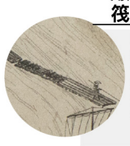
茨城 VR ツアー（https://www.vr-ibaraki.jp）内、筑西市のおすすめ観光名所案内 VR ツアー「川島橋」ページより

みつけてみよう！



川舟

この辺りで活躍していたのは小型の高瀬舟や小蘋飼船（浅瀬や急流に適した軽量小型で平底の木船）。米俵を 1 度に 25~30 俵積めて、下流の久保田河岸で大型の高瀬舟に載せかえていたんだって。



筏流し

江戸時代、材木を運ぶために鬼怒川を利用した筏流しが行われていたんだよ。同じ長さに切り揃えられた丸太をつなげて筏を作り、二人組で前後に乗ってさおとあおり（オール）でそうさして下流へ向かったんだって。

蒸気機関車

1889 年（明治 22 年）に水戸線が開通。昭和 42 年に電化されるまでは蒸気機関車が活躍していたんだって。当時の橋脚は銅版画からも分かるようにレンガ製。鬼怒川東岸にまだレンガの一部が残っているらしいよ。

荷馬車

この銅版画の面白い点は、人が担いだり、荷馬車やトロッコ、船に蒸気機関車まで運送に関わる多くの手段がいっぱいえがかれているところ。色々な運び方で物資が広がっていくのが良く分かるね。

トロッコ

鉄道で運ばれてきた貨物を引込線路で運漕店横まで運び、そこからは小分けにしてトロッコに積替え、舟の荷積み場まで運んでいたんだね。逆でも使えるね。荷物の流れをいかに効率良くするか考えられていてスゴイ！

帳場

「川島運漕店」の看板を見つけてみよう！きっとここが受付となる帳場じゃないかな。荷主との取引で必要だった帳場道具が置いてあったり、帳場で働く番頭さんたちが忙しくしていたのが目に浮かぶね。

竿秤をかつぐ人

竿秤とは重さをはかる道具。はかるものをかけ、おもり分銅の位置を動かして、つりあったときの目もりを読む。江戸～昭和中頃まで使われていたんだ。
この人は何を計測していたのか気になっちゃうね。

もっと知りたい川島！

◀かわしまコネクトのホームページに川島河岸に関する情報と、川島の歴史に関するページを公開しています。
ぜひ、スマートフォン等で読み取ってもっとディープな川島をご堪能ください。

「大廻し」と「境通り陸付路」ルート

鬼怒川の水運は、東北地方から氏家に集まった荷物を主に阿久津河岸で小蘋飼船と呼ばれる小型の船に載せ、中流部の久保田河岸で大型の高瀬舟に載せかえ、利根川・江戸川を通り、江戸に運ばれました。この輸送ルートは「大廻し」と呼ばれ、主に米（廻米）などの重量物が運ばれました。

また急を要する物資や高価な品物は、久保田河岸で陸揚げされ、陸路で境河岸まで運び、そこから船に載せられ江戸に運ばれました。この輸送ルートは「境通り陸付路」と呼ばれました。

※江戸時代、諸国から集めた米を江戸・大坂へ輸送すること。

『鬼怒川・小貝川サミット会議』事務局・国土交通省　下館河川事務所　編集発行
鬼怒川&小貝川イベントガイド（rio）（特別号 2007）参照

徳川家康の特命により「鬼怒川・利根川・江戸川」のインフラ整備を行った。「東北地方」と「江戸」を結ぶ経済の大動脈となり、その恩恵で「川島河岸」、「久保田河岸」、「小川河岸」が繁栄した。（川島河岸銅版画看板として令和5年 10月29日に川島駅前に建立）